# 松本総長

VOICE

# 総長就任挨拶
# 伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して

平成20年10月2日

平成20年10月1日をもって第25代京都大学総長に任命されました。その重責を果たすべく、意義ある大きな仕事に挑戦し、京都大学のために身を捧げるつもりでいます。

本日は、就任にあたって、日頃考えていることをもとに、これからの京都大学の進むべき方向について私の基本的な考えを皆さんにお示ししたいと思います。

京都大学は創立以来、自由の学風のもと闊達な対話を重視し、京都の地において自主独立の精神を涵養し、高等教育と先端的学術研究を推進し、111年が過ぎました。京都大学は平成16年4月1日から国立大学法人京都大学が設置され、その法人が京都大学を設置するという形態に変わりました。法人化後は、中期目標設定および評価基準の導入など、国立大学時代とは異なる新たな制度・環境変化への対応が求められています。

激動の変革期といえる現在、京都大学には、自由の学風を継承発展させつつ多元的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献することが期待されています。

教育基本法第七条に「大学は、学術の中心として、高い教養と専門知識を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、その成果を広く社会に提供することによって、社会の発展に寄与するものとする」と明記されています。この基本法の精神において、第一の使命である教育は「知の伝承」を通して広く人材を育成すること、第二の使命である研究は、最先端の研究活動を行い「知の創造」、「知的体系の構築」のため深く真理を探究するということです。また、大学における創造的な研究活動には、その過程に学生たちを積極的に参加させ、次世代を担う優秀な人材を育成するという重要な機能があります。このように、大学における教育と研究は車の両輪をなすものであり、不即不離でなければなりません。第三の使命である社会貢献にはいろいろな形態があり、知の社会発信、産官学連携、政策提言、附属病院の高度医療など多様な展開が可能です。

このような多様性を特徴とする大学の使命を果たすべく、時流に流されることなく、凛とした気概を持ち、学術の府としてその存在を国内外に示し、同時に京都という誇りと文化に満ちた環境下で、教養人、国際人、世界的研究者を輩出し続けることができるよう、京都大学を確固たる戦略のもとで運営していくことが求められています。

大学こそが知の源泉であり、衍沃（えんよく）な大地のごとく、我が国および人類の将来にとって人材と研究成果を生み出す欠くべからざる存在と考えます。

言うまでもなく、大学の根本は教育と研究です。それらをさらに充実するためには、教員、職員が誇りを持って仕事に取り組むことができ、その中で優れた学生が育成され、その学術環境が持続可能であることが必要です。人材こそが大学の最も大きな資産であります。それを活かすためには、教職員を今以上に大切にする雰囲気を醸成することが肝要です。すなわち、教員が教育や研究に専念できる抜本的な体制作りが喫緊の課題です。また、教育・研究・医療を支える職員が誇りと向上心を持てる体制を確立することも重要です。そのため、教育支援、学生支援に加えて、確固とした財務基盤、研究支援、国際交流支援、環境施設整備を強化する大学全体としての戦略がなければなりません。

大学には語るべき多くの項目がありますが、今回は以下の、教育、研究、人材活用、国際化、アウトリーチ、基盤整備について考えを述べてみたいと思います。

### 1）教育について

教育は大学の根幹をなす活動です。国際社会においてリーダーとなりうる優れた人材を輩出する教育システムとその実績がますます重要な大学の評価基準となります。とくに、国際舞台では、高度な専門性を基盤とする発言力、研究成果の発信力、コミュニケーション能力などが必須とされます。さらに、世界のリーダーに広く見られるように、深い教養と高い識見も求められます。私は“学問は真理をめぐる人間関係”と考えており、この資質を大学において涵養することは大変重要と考えます。そのためには、理系、文系を分かたず主として学部1、2回生の時期に、全人教育が十分行えるシステムが必要です。そこでは、専門基礎は最小限にとどめ、リベラルアーツの科目を中心にして人間力涵養をはかることが重要と思います。若い時代に多くの人に出会い、異分野にまたがる友人ネットワークを築くことは生涯の宝となります。

学部・大学院時代の専門教育は、学生に対して専門家としての基盤を築かせる重要な大学の活動です。大学全体の教育理念や教育制度のあり方についても十分な議論を尽くすとともに、教育の理想と時代の要請に応えることができるよう、必要であれば改革についても積極的な取り組

みを進めてゆきたいと考えています。

ただし、全人教育や全学的な専門教育の制度改革は短期間にできるものではありません。10年先の京都大学の教育目標を定めて、全部局が協力して教員配置・役割分担も含めてじっくりと議論する必要があります。また、教育環境整備も計画的に全学で推進すべき課題です。諸外国の大学環境に比し、現在の京都大学の教育環境整備にはさらに改善すべき余地があります。

対話を根幹とした自学自習・自得自発という理念を実現する上でも、履修支援、進路指導、キャリアサポート等を全学的に検討し、学生支援をさらに充実してゆく必要があります。

**2）研究について**

研究は教育とともに重要な大学の使命です。研究大学として京都大学はこれまで多くの実績を上げてきました。本学は、世界をリードする自然科学、人文学、社会科学の基礎から応用までの幅広い研究分野において大きな足跡を残し、伝統を築いてきました。しかし、国内外の大学のグローバル戦略が進行する中、安閑としていられる状況にはありません。総合大学の長所を生かすためには、競争的資金になじまない基礎分野、長期の研究期間を必要とする研究分野などをしっかりと支援する財政的仕組みを構築する必要があります。

これまでに基礎学術分野を学内的に支援する全学協力経費に競争的資金等の間接経費と寄附金の一部を充当してきました。このような学内制度を効果的に機能させることで、競争的資金を獲得できる研究分野の推進のみならず、大学全体の学術研究の健全な発展を支えることが可能となります。

世界レベルの研究競争を勝ち抜くためには、学会、国内・国際共同研究、産官学共同研究などに対して開かれた研究体制のもとで、教員個々人が切磋琢磨することが求められます。そのためには、教員が可能な限り研究に専念できるように、全学的な支援体制を考えねばなりません。さらに、“白眉”と呼びうる優秀な若手研究者を確保し、次世代研究者として育成することが、今後の研究大学、高等教育機関としての最優先事項です。

グローバルCOEプログラム、科学振興調整費、受託研究等の申請段階からの支援に加えて、これらが採択された場合の各種支援を全学で組織的に行うことも今後は必要不可欠です。また山中伸弥教授のiPS細胞研究など、傑出した研究成果を出した研究グループへの積極的な全学支援ができる体制作りも、今後の画期的な成果を目指す教員にとって大きな励みになると思います。すなわち、申請書作成、報告書作成、経理処理、科学コミュニケーション等の全学的な人的・物的支援は、個別支援よりも、より効果的と考えられるからです。

また、社会や学術の情勢変化に柔軟に対応できるよう、全学の部局組織を超えた人事交流や研究グループ形成を円滑に進めることができる制度を構築する必要があります。

**3）人材の活用**

中間職種の創設と多様な人材（女性・外国人等）の活用は本学にとって重要な課題です。

国立大学時代には、教員・職員間の意思疎通が十分とは言えない部分もありました。法人化後は教員と職員とが協力して問題解決にあたらなければならない難問が山積し、教職協働の意識と行動が一層重要になってきています。従来の委員会の陪席だけでは職員は十分に自らの意見を述べることができなかったので、私が所掌する委員会などでは職員も委員として参画するように進めてきました。今後は全学的に教員と職員が共に議論し、新しいことにチャレンジできる体制作りを進めていきます。その中でルーティンワークだけでなく、専門的な業務のできる職員を中間職（アカデミックスタッフ）として位置づける制度を創設し、積極的に学内に配置していきたいと思います。専門化した中間職種の職員を増やして、教員が本来の教育・研究に専念できる環境の構築を目指します。

京都大学における女性研究者、女性職員の数はまだまだ男女共同参画からほど遠い状態にあると考えます。これを改善するためには、キャリア・パスの各段階で女性が不利になる条件を一つ一つ取り除いていく必要があります。また、教育や研究の現場を外国人に開かれた環境にすることも京都大学の国際的プレゼンスの向上、グローバルスタンダードへの大学の対応の道筋と考えます。もちろん無理な数値目標を定め、教員・職員の質を犠牲にはできません。言語・生活環境の地道な整備によって状況を改善していく必要があります。

**4）国際化について**

世界中の主要大学は国際連携を積極的に進めています。京都大学にも海外から多くの連携の打診があります。京都大学はアジア、特に東南アジアで活発なフィールド研究活動を展開しており、強固なネットワークを構築しています。東アジア、アフリカにも研究教育拠点、連携拠点の展開が進んでいます。しかし、先進欧米諸国の大学との学術連携は個々の研究者間、あ

るいは部局間にとどまっており、大学全体としての本格的な連携や協力関係のための拠点作りは遅れています。すなわち、南北だけでなく、東西(欧米)にも拠点ネットワークを構築し、京都大学の国際的プレゼンスを高め、優秀な留学生、研究者の確保を図ることが急務です。その実現のためには、欧州での拠点設置、米国でのネットワーク活用などの措置を迅速に講じる必要があります。

また、さらに国際化を進めるためには、留学生寮、外国人研究者の生活環境整備などを計画的に推進するとともに、外国人教員の増員も必要です。

**5）アウトリーチについて**

大学のアウトリーチ活動は多様化し、すでにかなりの実績を京都大学は挙げてきました。広報、産官学連携、共同研究、地域連携等をとおして京都大学の現状と将来構想、教育・研究の考え方などを社会に発信していますが、今後その機能をさらに強化する必要があります。同時に、国際社会に対して学術誌、マスメディアなどを通した発信のみならず、教職員が積極的に国際舞台で活躍することが必要であると思います。

アウトリーチ活動の一環として、博士学位取得者を、キャリアサポートセンターや教育研究現場での十分な研修の後に、企業、官庁、地方公共団体などに派遣する制度なども、広い知識を身につけさせる機会として有効であると思います。

**6）基盤整備について**

国立大学時代には、大学のキャンパス整備、施設整備、大型研究設備整備等の各種インフラ整備は文部科学省など国の所掌事項でした。しかし、法人化後は、これらの整備は基本的には各大学法人が進めるべき事項となりました。このインフラ整備財源確保は今後の大学運営にとって難問ですが、目的積立金や寄附金、基金利益などの活用によって計画的に進める必要があります。とくに早急に行わなければならない対象は、遅れている桂キャンパスの整備の他、学生寮、職員宿舎、学生課外活動拠点、図書館、駐輪場などの整備です。施設整備のみならず、キャンパス間交通網、環境安全リスク管理システム、共通情報システムの構築、研究者総覧データベースの充実など多くのインフラ整備が必要であり、これらの課題に積極的に取り組んでいきたいと思います。

私は人こそ大学の礎と考えています。すなわち、教員・職員ともに能力を発揮することができる職場として大学の制度・仕組・意識などを改革し、魅力・活力・実力ある大学にしてゆきたいと思います。

総長就任に際し、長尾真元総長から「楽天知命」と揮毫された書をいただきました。これは、易学からとられたもので、「天を楽しみて命を知る」と読み、天命を受け入れて、自分の使命を全うせよ、とも解釈できるようです。大学を取り巻く社会状況はますます厳しくなってきておりますが、なによりも学術の府として、京都大学の伝統である対話を重ね、構成員全員が誇りを持って京都大学の明るい未来に向けて前進し、社会の期待に応えていかねばなりません。そのために粉骨砕身努力する所存です。皆さんのご協力を心よりお願い申し上げます。

# 平成21年度学部入学式 式辞

平成21年4月7日

大きな可能性に瞳を輝かせ、この場に臨まれた3,006名の皆さん、京都大学にご入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長とともに、今日の佳き日をお祝いしたいと思います。京都大学に入学するまでに、皆さんは、さまざまの長く厳しい受験の道を辿ってこられたことと思います。敬意を表したいと思います。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

私は、昨年10月1日、京都大学第25代総長に就任いたしましたが、皆さんは、私が総長となって初めてお迎えする学部入学生です。今年は、入学式会場を、これまでの吉田キャンパス内の総合体育館から、ここ平安神宮前の「みやこめっせ」に移して、今回がここでの初めての入学式となります。

さて、入学された皆さんに第一に申し上げたいことは、本学の教育と研究の理念です。本学を受験されるにあたり、大学が定めている理念をすでに読まれていると思いますが、本学の理念は、次のようになっています。

「京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基

礎に、ここに基本理念を定める。」とあります。この理念の根底にあるものの一つは、「自主自立」の精神であり、それは、本学の学生諸君には、一人の成人として、自らに責任を持ち、自ら主体的に勉強と研究を行ってほしいということです。本学は、「自由の学風を持つ」と社会から言われることが多いのですが、そのきっかけの一つは木下廣次初代総長の言葉にあります。

今から遡ること112年前の1897年9月13日、本学初の入学式にあたる、入学宣誓式において、木下先生は、「諸君は既に後見を脱したる者として吾人は諸君を遇する也。因て平素の事は細大注入の主義に依らず自得自発を誘導することを務めんと欲す」との教育方針を示されました。

京都大学では学生を独立した一人前の大人として扱い、学生諸君は自主的に責任を持ち、自ら発し、主体的に学習や研究を行ってほしいと希望したのです。やがて、この自由尊重の精神が京都大学の伝統となりました。

言うまでもないことかもしれませんが、皆さんにはくれぐれもこの「自由」を誤解しないようにしてほしいと思います。自由は、勝手気ままで無責任な態度や行動を意味するのではありません。私の理解する自由というのは、自分自身がいろいろな発想をして、自分で自分を大切にして、個人が光るということです。

また個人が組織に縛られずに自由な発想で行動しつつも、常に社会や周辺の人々を思いやり、責任ある態度を貫くことです。

京都大学の特色は、そうした諸先輩が数多くいて、それらの諸先輩が、学術界・経済界・政界・文化界など多方面で活躍し、独創的で大きな仕事や業績を残されてきたことにほかなりません。京都大学にいるすべての人に個性があって、自己を確立していて、すばらしい人たちの集団にいるという自覚をすること、このことはとても大事なことです。己の中にある自らに恃むことができるよう、自らを鍛えるという「自鍛自恃」という基本的な考え方も身につけてほしいと思います。

これから、大学での学びが始まりますが、それは高校までのものとは大きく異なり、それに戸惑うこともあるかと思います。これまでの学びには、常に答えがありました。しかし、大学で学ぶ学問には、答えは1つではありません。答えがわからないことが多く、それをどのように解いてゆくか、その方法論を学ぶことが必要です。そのためには、受け身の姿勢のままでは、京都大学での学問は成り立たないことをまず申し上げなければなりません。皆さんは、いずれ日本社会のみならず世界のリーダーとして様々な分野で活躍してゆくことになると思います。そのためには、自らが専攻する学問分野の基礎と応用知識や技術を身につけるだけではなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識をどん欲に獲得し、それをもとに多元的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。

チャレンジする対象をどのようにとらえ、定式化し、解いてゆくかという、真の思考が求められるのです。手がかりとしては、さまざまな学問分野で編み出されてきた方法論を学ぶことが有効な手段となります。

京都大学における学びの機会は、真理探求の道を自らすすむ者には、あまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。

決してあきらめず、闊達な対話と相手を尊重し、自らを重んじるよう心がけてください。

教授陣をはじめとする教員は未知のものを学ぼうとする者に対して、同じ道を歩む先達として真剣に向き合い、必要なそして多様なカリキュラムを用意しています。

これこそが京都大学の伝統的な教育と研究のやり方です。その成果として、1949年、日本で初めてのノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生や朝永振一郎先生を初め、昨年物理学賞を受賞された益川敏英先生・小林誠先生や、一昨年iPS細胞を世界に先駆け作り出した山中伸弥先生の研究などが結実することになったのです。

これらのよく知られた研究成果以外にも、とても数え切れないほど多数存在する本学の世界最高水準の研究は、既成概念にとらわれない自由活達な議論、そして真摯な学問追求の姿勢から生まれました。本学は10の学部、質の高い17の大学院研究科と専門職大学院、加えて全国でも最も数と多様性を誇る13の研究所も擁する日本最大級の総合大学であり、自ら望めば他分野の知識獲得を容易に行いうる環境にあります。

さらに、全学共通教育では1回生を対象としたポケットゼミナール（通称ポケゼミ）と呼ばれるユニークな少人数クラスなどを通じて、これら世界の最先端を走る研究者に直接に接する機会にも恵まれています。

最近の社会問題には、グローバルな金融危機に端を発する経済不況、資本主義の在り方、所得格差などが顕著化しています。人権の保護や多様な視点による共同参画社会の実現なども最重要課題として取り組んでいく必要があります。また、地球環境問題では、生命の起源の探求、安全な医学的応用、新物質や材料の探査、新エネルギー開発、地球環境の機能保全から宇宙開発まで、難問、課題が山積しています。

今、まさに人類にとって地球が有限に見える段階になり、人間自身の生存が問われる時代に皆さんは直面することになります。まさに学際的かつ俯瞰的に物事を考える「生存学」が問われはじめています。私は国際会議などで、海外の研究者と長年交流してきましたが、世界的な研究成果をあげている研究者の多くが、自らの研究とは全く異なる分野の学識も豊かで、人間としてとても魅力的なことに驚かされてきました。

理系の人でも哲学や法学や文学、歴史と言った文系分野にも明るく、文系の人でも、工学や医学や理学・農学と言った理系の学問に強い興味を持っています。

皆さんにも、そういう国際的知識人としての教養を身につけると同時に、専門家としての知識にのみとらわれず、一段高い視点から今後の世界を見る能力を得てほしいと思います。そのためにも、皆さんが経験するこれからの大学生活では、読書にも多くの時間を捧げることを総長として希望します。それも多読によって、視野を広げ、精読によって深く思索し、自らを磨き、複雑で多元的な問題に対処できるようになってほしいのです。インターネットで安易に情報にアクセスするのではなく、理系文系にとらわれることなく、読書によって頭を耕し、時空を超えてほしいと思います。読書によって、いにしえの賢者に相まみえ、世界中の先達を友としてください。そのためには、語学もまた大事であり、この機会に是非さまざまな外国語の習得にも努力してほしいと思います。真の国際人にはどうしても国際語は必要とされます。若いときにチャレンジした外国語はたとえ忘れることがあっても、再度必要なときにその語学の勉強を再開する上では非常に役立ちます。

現在、大学にはおよそ3,000名の教員とおよそ2,500名の職員、およそ22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は将来きっと皆さんの人生を彩り深いものにすることでしょう。

勉強や研究で出会う人のみならず、クラブ活動やその他の出会いを大切にして、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆さんには、何よりも自らの健康を大切にし、体とこころを鍛え、学業に励んでいただきたいと思います。そして、新たな友人と出会い、語らい、課外活動やボランティア活動等様々な可能性に目を向け、力一杯活躍されんことを願いたいと思います。

「初め有らざるなし、よく終わり有る鮮し（すくなし）」という言葉があります。

皆さんが入学に際し、それぞれの思いで志を新たにしておられると思いますが、どうかそのフレッシュな意気込みを忘れることなく、ぜひ有終の美を飾ってくださることを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学へのご入学、おめでとうございます。

# 平成21年度学部卒業式 式辞

平成22年3月24日

本日、学士の学位を授与される2,752名のみなさん、ご卒業おめでとうございます。ご来賓の沢田敏男元総長、井村裕夫元総長、名誉教授、列席の副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、みなさんのご卒業を心からお祝いいたします。あわせてご家族、ご友人、関係者の皆様にもお慶び申し上げます。

京都大学の113年の軌跡において、みなさんを含めて本学の卒業生の累計は、18万5,365名となりました。みなさんの前には18万人を超える先輩が存在することになります。

みなさんは今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、人類全体の生存基盤がおびやかされつつあるこの困難な時代に、世界を舞台に未来を切り拓く使命を果たさねばなりません。その使命を果たすためには、これまで習得した知識だけでは十分でないことはみなさんも重々承知されていることと思います。知識はネットワーク化され、一つの体系をなさないと臨機応変に使えるものとはいえません。また、ネットワークをなすのは個別の知識にとどまらず、その周辺にある人間関係も自然にその構成要素となります。人間関係のネットワークは融通無碍なものです。同世代のネットワークに加えて、先輩後輩友人や教師とのネットワーク、更に書物などを通じ時間軸や国境を

越えたネットワーク、例えば、過去の巨星もあなたのネットワークの一員になっているかもしれません。「学問とは真実を巡る人間関係である」と私が信ずる所以であります。大学生活を通じて築かれた、時空を超えた知識のネットワークがみなさんの重器です。今後はますますネットワークを広げ、世界が直面する多元的な課題の解決に挑戦していただきたいと思います。

かつて本学の教授を務めた哲学者・和辻哲郎先生は「成長を欲するものは、まず根を確かにおろさなくてはならない。上に伸びる事をのみを欲するな。まず下に食い入ることを努めよ。」という言葉を残されています。ネットワークはこの根に通じます。根を伸ばし、根を大きく張り、様々のよきものを自らの栄養として貪欲に吸い上げ、常に120％の目標を持ち続け自らを大樹となしてほしいと思います。

みなさんはこれから社会において多くの試練に直面することになると思いますが、苦難の時にこそ、大学を思い出してください。大学というものは、学生の自学自習を鼓舞し、広い視野と深い教養を身につけるにふさわしい衍沃な土壌です。学生にとって大学は、それぞれが社会で自立できるよう自らを鍛え、強い気迫と意志、人の気持ちがわかる情の豊かさ、深く広い知識、即ち、知、情、意の充実をはかり、体力を強化し、人間力を磨き上げる場所でなければならないと私は考えています。みなさんは大学を卒業して初めて、いかに才能にあふれ、素晴らしい人々に囲まれていたかがわかることでしょう。社会人として旅立つにせよ、進学するにせよ、この卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つみなさんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業するみなさんがときには母校を訪ね、語らい、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。

これからも世界は大きく変貌していくことでしょう。その激動の原動力と対応力はすべて人にかかっています。このことを受け、世界の先進国は人づくりの最終段階ともいうべき高等教育に力を入れて、更なる発展の道を高等教育が生み出す技術革新にかけようとしています。一方、我が国の高等教育に対する財政支出の水準はOECD加盟国中最下位であり、最近5年間の高等教育費の伸びはOECD加盟国で唯一マイナスになっています。その結果、不況にあえぐ家計が高等教育を支えつづけなければならないという現実があります。ご家族の厚い支援に大学として御礼申し上げるとともに、卒業生のみなさんには、これまでのご家族の負担や支援に対し、今日の良き日にぜひ感謝の気持ちを伝えてください。

本日、みなさんの卒業の記念に風呂敷を用意しました。風呂敷は「包む」、「結ぶ」、「広げる」といった使い方から、「幸せを包む」、「人を結ぶ」、「つきあいや見識を広げる」という意味に通じるといわれています。京都大学を卒業されるみなさんが、人との結びつきを大切にし、更に見識を広げ、それぞれの幸せに包みこまれますように願って、本記念品を贈ります。

最後になりましたが卒業して、社会で活躍されるみなさんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍しつつ、みなさんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もお願いします。また、約6割を占めるみなさんは、修士課程に進学され、大学院で学び、研究を続けることになりますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、体とこころのバランスを大切にして、ご活躍されることを願い、学士の学位を授与されたみなさんへの私のお祝いの言葉といたします。

ご卒業おめでとうございます。

## 平成23年度学部入学式 式辞

平成23年4月7日

本日、疎水の水面に桜映ゆるこの「みやこめっせ」にご参集の3,031名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。ご来賓の尾池和夫前総長、名誉教授、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの長く厳しい勉学が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

さて、みなさんは今国難ともいうべき巨大地震、大津波、それに続く原子力発電所事故の渦中でこの入学式に臨んでいます。この空前絶後ともいえる巨大地震と大津波で多くのかけがえのない命が失われました。この東日本大震災とそれに伴って起こった原子力発電所事故により被害にあわれている方々および被災地にご家族、ご親戚、ご友人・知人がおられる方々、ならびに被災各県出身の入学生のみなさんに心からお見舞い申し上げます。

国を挙げて救援、復旧活動が進められ、復興も検討され始めたこの時期に大学に入学するということは、生涯忘れることのない記憶として残ることでしょう。そして、今被災地を中心に日本人が互いに助け合い、整然と秩序ある行動をとり続け、日常を取り戻そうと努力している姿は、日本人が尊重してきた「和」の精神を世界に向けて示すものとなっています。そこで示される自助と共助は日本人の誇りです。被災地から離れた京都においても、被災地の苦難を分かちあい、長く心を寄せ、復旧と復興に積極的に支援していきたいものです。

東日本大震災において、現代の先端科学技術の粋を集めた各種施設が大自然の威力の前でもろくも崩れ去り、大きな被害につながりました。これを短絡的に科学の限界ととらえ、みなさんは虚無主義に捉われてはなりません。今回の大震災に関していえば、科学者は地震や大津波について科学的知見をこれまで蓄積してきました。そのうえで、その知見をもとに、行政や各種事業者がリスクやハザードをどこまで経済的に許容するかという水準を想定し、社会は運営されてきたのです。そのような枠組みで本当に良かったのか、今後の社会のあり方をみなさんにもぜひ真剣に考えていただきたいと思います。

今回の東日本大震災を契機にすこし視野を広げて考えてみたいと思います。一見安定しているように見える大地は、実は変動を続けており、本質的に不安定であり、その上に私たちは営々と文明を築いてきました。さらに限られた資源を無限であるかのように錯覚し、経済成長を通じて生活の安楽さと利便性のみを追求していると次世代にとられかねない日々を送っています。地球が人類文明を支えきれなくなりつつあることを様々な徴候が示していることに鑑みると、我々はそろそろ文明のあり方を再考する時期に来ているのではないかとも思います。そのためにみなさんは歴史から過去を学び、それに現代の知識を組み合わせることによって、将来の長期的なビジョンやあるべき姿というものを構想できる人間にならなければなりません。

今の日本には、地球社会のリーダーに必要とされる、将来をはるかに見通す力をもつ人間はそう多くないように思います。例えば、みなさんの多くはこれからまだ50年以上生きていくことになるでしょうが、その半世紀先まで見通せる人間というのはそう多くありません。京都大学に入学のみなさんには、遠い将来を見通し、未来を創造できる人間をぜひ目指してほしいと思います。将来を見通すためには学術が積み重ねてきたデータの蓄積を咀嚼する能力が必要です。その上に立って、何をすれば、自分が理想とする、あるいは世界が理想としうる社会を維持発展させることができるかということを考えることができます。その際に、あるべき未来の姿を構想するためには、確固たる世界観や哲学が必要です。さらに、現代社会は高度に分業化された専門家社会です。大学の一つの機能はその専門家を養成することにあります。専門分野に深く切り込んで、既存の知識に何らかの新しいものを付加するという貢献、それが研究の営みです。やがて小さな貢献が集まり、壮麗な学術体系が構築されるわけです。換言すると、これこそが学術を形作ってきたのです。みなさんもその歴史的な営みに、学士課程の仕上げとなる卒業研究等で、ささやかながらも参加していくことになるでしょう。ただし、専門家は専門に専心するあまり、部分に埋没し、全体像を見失う危険があります。その弊に陥らないためにも、自らが専攻する学問分野の基礎と応用にかかる知識や技術を身につけるだけではなく、一見関係のないように見える他の幅広い素養や周辺知識を教養として貪欲に吸収し、それをもとに多元的に判断し、物事の本質を見抜く力量を備えてほしいと願います。そして、過去に縛られることなく、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を作り、それに肉付けし、4年後には今の自分と違う自分をそこに見いだしてほしいと思います。

京都大学における学びの機会は、真理探究の道を自ら進む者にあまねく開かれています。しかし、そこには、ときとして、濃密で激しい考え方のやりとりが必要となることもあります。決してあきらめず、「活達な対話」と相手の立場、考え方も尊重することを忘れず、あわせて自らも重んじるようこころがけてください。この自らを重んじるという「自重自敬」の考えは明治30年の本学の第1回入学宣誓式に由来します。その心得を説かれた木下廣次初代総長は書としてその言葉を本学に残してくださいました。その書は現在総長応接室を飾っています。また、木下総長は「自重自敬」の心得に続けて、「故に諸君は、既に後見を脱したる者として吾人は、諸君を遇するなり」と述べて、「自立独立」を学生に勧めておられます。ご家族や関係者の皆様には大学

生活のために一定の扶助をお願いすることにはなりますが、私たち教職員同様、入学生を独立した個人として処遇されることをお願い致します。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学在学中に出会い、そこで生まれる人間関係は、将来きっとみなさんの人生を豊饒なものにすることでしょう。学業において出会う人のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己、友人を得、多くの人々と考えを交換し、自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。我々教職員は、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者の皆様には、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。

最後に、みなさんに江戸時代に高い精度をもつ「大日本沿海輿地全図」と呼ばれる実測地図を作製した、伊能忠敬の心意気とその言葉を紹介したいと思います。伊能忠敬は50歳で隠居し、心機一転し、19歳も年下の高橋至時（よしとき）の門下に入り、西洋天文学、数学、西洋暦学を学び、正確な測量技術を確立し、55歳の1800年から71歳の1816年まで17年間全国各地を測量し、日本国の実測地図のデータを集めました。そして、目にした書物によると伊能忠敬は「精神の注ぎ候のところより自然と妙境に入り、至密の上の至密をも尽くし候」という言葉を残したそうです。その大意は、一点に精神を集中すれば、勉強や仕事に自然と興味が湧き、最上の結果に至ることができるということです。みなさんも自らの集中すべき一点を見つけ出し、そこで刻苦精励されることを願います。そして、健康に留意し、様々な自分の可能性に目を向け、力一杯活躍され、誇りある京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

## 平成23年度学部卒業式 式辞

平成24年3月27日

本日、ご来賓の尾池和夫前総長、列席の理事・副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,818名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深く敬意を表するとともにお慶びを申し上げます。京都大学の115年の歩みの中で、皆さんを含めて本学の卒業生の累計は、191,105名となり、皆さんの前に約19万人もの先輩が歩んでいることになります。

併せて、ご家族ならびに関係者の皆様よりいただいた、今日の卒業式を迎えるまでの数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。そして、卒業生の皆さんには、これまでのご家族の負担や支援を肝に銘じ、この機会に感謝の気持ちをご家族に率直に伝えるよう希望します。

我が国は、昨年の3月11日に未曾有の東日本大震災に見舞われ、復興への力強い槌音（つちおと）は聞かれるものの、まだ道は半ばという状況にあります。この厳しい時代に皆さんは一市民として、また今後社会のリーダーとして京都大学で培われた人間力を基礎に、持てる力を発揮し、世界を舞台に我が国と人類社会の未来を切り拓いてほしいと思います。

そのために、大学院進学の皆さんは、専門ごとに分かれてこれからさらに学術に磨きをかけることに力を注いでください。一方、社会に羽ばたく皆さんは、職場では社会の様々な問題とこれから日々格闘していかねばなりません。いずれの道にすすむにせよ、これから歩む長い人生において、大学生活において身につけた知識や体験ではまだまだ十分とはいえず、途方に暮れるような試練に直面することでしょう。その際には、大学での学びを基礎に常に柔軟かつ強靭に思いをめぐらせ、道を切り拓いていってほしいと思います。

芸術の世界においては、芸が観客の心に染み入るには、作りごとと実際のどちらともいいがたいような微妙な兼ね合いが大切であるといわれています。虚のみならず、実のみならず、その境界である皮膜にこそ芸の妙があるとする、この虚実皮膜論は江戸時代の劇作家近松門左衛門が語ったものとされています。

私は、この虚実皮膜論は芸のみならず、人生そのものにも通じると思います。我々は日々の思考において、「虚」と「実」の双方をめぐらしています。「虚」には、「実」で

ないこととして、今現実のものとはなっていないけれど、「こうしたい、こうありたい」という内容を含めることができます。これは当然まだできておらず、実現していないものです。例えば、理想や夢といったものを「虚」に数えてもいいでしょう。一方で、「実」、すなわち現実は我々の周りに確かに存在します。現実から離れすぎると何も具体化することはできません。我々は、この「虚」と「実」を行き来しながら、そのどちらかに埋没するのではなく、その虚実の皮膜で起こるせめぎあいを通じて、心にある意志をこの世の中で実現させていく存在なのではないでしょうか。

学問の世界にも虚実があるとされます。学問の虚実は虚学と実学で代表されます。実学は平たくいえば、実際に役に立つ学問であり、虚学はそうではない学問、すなわち直接または今すぐ何かの役には立たない学問です。皆さんの学んできた学問分野がどちらに分類されるかを議論してもあまり意味はありません。その境界はかなりあいまいだからです。

それよりむしろ学問における「虚」と「実」の役割を考えることの方が重要です。そもそも研究は、理性の力で「実」を見ながら「虚」を追求するという形ですすめられます。いいかえると、研究者の研ぎ澄まされた感性で実の根源を探りながら、頭の中で「虚」の世界を構築し、「実」の根源を解明していこうとします。このように、学問は、実体をもとに、実体から離れた抽象論を積み重ね、作り上げられていくものなのです。事実を集積するだけでは学問とはいえず、それらを抽象化して、原理原則を打ち立てることに学問の真骨頂があり、それがひいては幅広い「実」につながっていくものなのです。その意味で、学問もその本質はこの虚実のせめぎあい、それが行われる虚実皮膜にありといえるのかもしれません。

この虚実皮膜で抽象化されていることは一種の理念と現実の格闘とみなしてもいいかもしれません。志によってデザインされたこの虚実皮膜にこそ人生の醍醐味と真実があります。そして、虚実皮膜の厚みや豊かさを決めるのが、皆さんのこれまで培ってき、今後ますます蓄積しなければならない、教養なのです。これからも教養を深めることを怠ってはならない所以です。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、新しいスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんがときには母校を訪ね、語らい、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として京都大学を人生の基軸として積極的に活用していただけるよう願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんには、様々な場所で、京都大学で身につけた自学自習の精神を活かして活躍されることと思いますが、一方で皆さんの母校である京都大学で研究教育を続ける研究者の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、私は京都大学が優秀な人材を活かせる大学であるように、学内外で必要となる改革を進めていきたいと考えています。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じ取れるよう、バランス感覚を大切にし、知勇兼備の人としてご活躍されることを願い、「虚実」の間を良く考え生きて行かれることを期待し、学士の学位を授与された皆さんへの私の餞（はなむけ）の言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

## 平成24年度大学院入学式 式辞

平成24年4月6日

本日、京都大学大学院に進学される修士課程2,234名、専門職学位課程329名、博士後期課程884名のみなさん、おめでとうございます。ご来賓の長尾真元総長、列席の副学長、研究科長、学舎長、教育部長、研究所長、および教職員とともにみなさんの進学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

我が国は、昨年3月11日に東日本大震災に見舞われ、この国難からの復旧や復興のさなかにあります。国を挙げての復旧や復興が道半ばにも至っていないこの時期に進学することをみなさんは片時も忘れてはなりません。そして、我々は被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、復興に協力する決意をここに新たにすべきです。

震災を契機に、今後被災地にどのよう

な手助けをしようか、どういう貢献が大学院生としてできるだろうか、さらには安寧の世界をつくるにはどうしたらいいか、専門を極めることだけでいいのだろうか等、様々に悩み、考え始めていることと思います。災害からの復興にはあらゆる専門知識が必要とされます。すなわち、非常時、復旧時、復興時といった異なる段階において、日本や世界といった異なる場所において、それぞれ緊急性の高い活動を機動的に成し遂げるための広範囲に及ぶ専門知識が必要です。しかし、みなさんは不幸な大災害の全体構造を常に心に置きながらも、まず自分の専門分野を通じた貢献を考えてください。さらに、みなさんが生き抜いていかねばならない今後50年のあるべき姿を見通し、地球社会のリーダーのひとりとして活躍できるような研鑽も積んでください。みなさんの多くは自分自身の素材としての価値を十分には認識できていません。私も大学院修士課程に進学したほぼ45年前にはあまり自信が持てず、人生についてはっきりした見通しを持ってはいませんでした。周りの人々も同様であったと思います。しかし、現在多くの友人は日本あるいは世界のリーダーとして活躍をしています。みなさんは確実に社会のリーダーとなる人材です。社会において中心的役割を担い始める十年先をひとまずの目処にリーダーに必要な知識体系を準備しておいてください。さらに、リーダーとして世界で活躍するには語学力、説得力、企画力、発信力、感化力などの人間力も併せ涵養されている必要があります。

さて、みなさんが進学する修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養の蓄積の上に、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家として独り立ちできるよう体系的な教育が行われます。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う新たな教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍しうる人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信していくよう指導が行われます。これら大学院において、みなさんは専門分野において世界の最先端に躍り出ることを目指してください。その努力は遠からず実を結ぶものと私は確信しています。

これから大学院において、みなさんは研究の真の面白さを体験することになるでしょう。私の体験をお話しすると、研究室に入ることがその始まりでした。多くのみなさんは、体育会やクラブを除けば、少人数での共同作業、共同生活をあまり経験してこなかったと思います。大学院で研究室に入ると、否が応でも共同生活を送ることになります。身近にライバルがいて、日々指導教員と密なやりとりができ、これまでとは違った生活を送ることになります。そのうえで、所属する研究室や研究グループが取り組んでいるテーマについてその舞台裏を垣間見ることになります。また、京都大学は物事の根源を尋ねること、すなわち「務本」を志向する大学であり、本質は何であり、それは何故かということが常に議論されます。その探求過程において、知識獲得のために漠然と勉強していた時には気がつかなかったこと、とりわけ自分はいかにわかっていないかということ、一方で自分のみならず、世の中にはこんなにわかっていないことが多いのかということがわかってきます。論語に「これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり」という言葉があります。要するに、わかったことの認識のみではまだ足りず、わからないことをわからないと正しく認識することによって、真の理解に到達するということです。無知の知ならぬ、不知の知といえましょう。ここまでくれば後は簡単です。「よし、私が、誰も気がついていないこれをやってみよう」とか、「まあ他人がやっているかもしれないけれど、私もそのことについてわかりたい」と独創への船出が自然に行われます。このように研究室における共同生活を通じて、はじめはおぼつかない足取りだったものが、研究を続けるうちに、「あれ、誰よりも私のほうが良く知っている」ということに気がつき、それが自信に繋がって、研究に邁進する原動力となります。これは私の体験にすぎませんが、みなさんにはみなさんの機会が用意されています。これからの大学院での時間を生かし、みなさんのみずみずしい感性で研究の真の面白さを味わい尽くされることを期待しています。

本学には大学院を中心にして1,800名を越える留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学生交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会を提供しています。また、多くの京都大学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に拡げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。それは何事にも代え難い有意義なものとなるでしょう。私も初めて海外に出た若い時代の心の高揚を今でも忘れることはありません。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要として

います。我が国あるいは人類の未来は我々自らの手で拓かねばなりません。みなさんが、京都大学の大学院生として、さらなる高みを目指し、既成概念にとらわれず、常に「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくと同時に、自鍛自恃の精神で自らの心身を磨いていかれることを願い、私のお祝いのことばといたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進学、おめでとうございます。

# 平成25年度学部入学式 式辞

平成25年4月5日

本日、例年よりも優しい薄緑の柳の新芽が風にそよぎ、桜舞うこの「みやこめっせ」に参集の3,025名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。都大路にはすでに躑躅の花もところどころ見受けられ、厳しく長い冬を経て、雪解け後に様々な草花が一斉に開花を迎える北国の花畑を髣髴とさせる状況に、身のまわりの気象の変化を強く感じました。自然現象と同じく、人間社会も疾風怒濤のごとく変化しています。

ご来賓の長尾真 元総長、尾池和夫 前総長、列席の副学長、各学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学をお祝いしたいと思います。また、みなさんの日々の研鑽が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

2011年3月11日に起こった東日本大震災による国難は今なお続いています。国を挙げての復旧や復興はまだ途上にあるといわざるを得ません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。今、大学に入学するみなさんはこのことを肝に銘じ、自ら行いうる貢献を主体的に行ってください。

さて、みなさんは、入学後の様々な可能性に心躍らせ、今日を迎えていることでしょう。これまで十分にできなかったスポーツや趣味、社会活動の機会や新しい友との出会いがみなさんを待っています。選択肢は無限です。みなさんはもしかすると、いわゆる「楽勝科目」で単位をそろえ、残りの時間は学生時代にしか出来ないことをやろうと考えてはいませんか。確かに大学生活で勉学以外のことに時間を費やすことは一つの選択です。しかし、勉学はそれにもまして重要なのです。「淮南子」に「時は得難くして、失い易し」とあります。世界で活躍している本学の卒業生と話をすると、みなが異口同音に言うことがあります。「大学でもっと勉強しておけばよかった」。勉強なんていつでもできると今のみなさんは思っているかもしれません。先輩方もそう思ったのでしょう。現代社会においては一生学び続けなければ、冒頭でふれた疾風怒濤のように流れる社会の動きについていくことはできません。大学で学ぶことは将来を通じて学ぶ基礎となるものです。例えるならば、人間の歩みとともに蓄積されてきた知識の宝庫を開く鍵を手に入れることが、これまで受けてきた教育以上に、大学での学び、とりわけみなさんの直ちに受ける教養教育によって可能となるのです。そして、そのような基礎作業は頭が柔軟なうちが効果的で、その果実は時間をかけて徐々に熟成していくものなのです。みなさんの人生の基礎を築く時間は、今を除いては、実はそんなにありません。京都大学としては、この4月から国際高等教育院を設置し、教養教育の改善に着手します。試行錯誤しながら、最善の教育をめざし、大学はこれからも変わっていきます。その過渡期に入学したみなさんは、易きに流れずに、しっかりと勉学に勤しんでほしいと思います。

大学生になって、今日からみなさんは新たな経験を様々にしていくことでしょう。しかし、クラブ活動であれ、授業であれ、書物を通じた経験であれ、経験というのはいくら積んでも、そのままではその人を変えるものではありません。経験を自分で咀嚼し、消化し、同化する能力をつけないと自分のものとはならないのです。同じことを経験しても、ある人はそれを糧に伸びる場合もありますし、全然変わらないこともあります。知らず知らずのうちに半可通になって、むしろ退歩する人さえいます。やはりそこには、自分を向上させたいと思い、自分を鍛え、他人に頼ることなく、自分自身に恃む、自鍛自恃の気概がないと経験はわがものにはならないと思います。

現在、京都大学にはおよそ3,000名の教員と2,500名の職員、22,000名の学生がいます。京都大学で出会い、そこで育まれる人間関係は、きっとみなさんのこれからの人生を豊かなものにすることでしょう。学業のみならず、課外活動やその他の出会いを大切に、生涯の知己を得、多くの人々と自ら進んで人間関係の綾を織りなしてほしいと思います。人間は己が考えるほどには、一人では何もできないものです。取り巻く周りの環境によって大きく左右されるのです。それゆえ、親友に巡り合

う、あるいは良い書物に巡り合うための努力を積極的にする必要があります。また、ひとりで努力しても解決できないことはたくさんあります。運、不運もあります。人から間違った方向に感化されてしまうことさえあるかもしれません。そのようなとき、常に人間関係も含め、自分の置かれている環境や自らを省みることが重要です。そして、その中から自分で確信の持てるものだけを選り抜き、可能な限り早い段階に自分自身の思想や人生哲学の骨格を形づくり、それに肉付けし、今と違う自分を確立してほしいと思います。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」。後輩もすぐあなた方につづきます。時の移ろいはみなさんが考える以上に早いものです。

また、知識は危ないということを忘れないでください。今の社会を生きるためには知識は確かに必要ですが、知識をそのまま金科玉条の如く信じてしまうことは危険です。特に私はインターネット時代の今それを強く感じています。レポートを課すと、インターネット上の情報などをいわゆる「コピペ」をして、全部同じレポートが出て来るといった笑えない状況が日本各地で起こっているそうです。そして、考えない。知識や情報が増えれば増えるほど、人間は考えないようになってきているのではないかと思います。それゆえ、溢れ出る情報を取捨選択する力、これをつけるのが大学において最初に学ぶべき事柄ではないかと思います。選択のうえ、自分の頭で常に考えてほしいと思います。

併せて、みなさんは時代が要請する国際性を養う必要があります。それは単に外国語ができるということではなく、歴史に学び、自国の文化をしっかり背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発信能力、自分の意見を恥ずかしがらずにいえる積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備のもと、海外留学を経験してほしいと思います。大学として体制を整備し、みなさんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

Adversity makes a man wise.

多くのみなさんはこの英語のことわざをご存知かと思います。日本語では、「艱難汝を玉にす」と訳されて人口に膾炙しています。私は、みなさんがこれまで十分に艱難を経験する機会に恵まれなかったのではないかと真面目に心配しています。「これまで困難な目に遭わなくて幸せで、それに遭う機会に恵まれない」と聞いて、不思議なことをいうものだと首をかしげている人もいるかもしれません。みなさんの同級生にも失恋したり、勉強がついていけないと思って、やめたり、挫けたりした人もいたと思います。親の経済的困窮で進学を断念した人だっていたはずです。世の中は自分が引き起こした艱難ばかりではなく、不可抗力的に被らざるを得ない艱難に満ち溢れています。艱難はあらゆる場所で口を開けて人を待ち構えているものなのです。艱難を乗り越える力は、過去に艱難を乗り越えた経験によってのみ鍛えられます。多分ここにいるほとんどのみなさんは、大きな艱難にこれまで遭遇できなかったことでしょう。艱難に遭遇し、乗り越えた人は強くなります。イギリスの詩人オリバー・ゴールドスミスは「私の最大の光栄は、失敗しないことではなく、失敗するたびに起きあがることである」といっています。確かに多くの人は起きあがれません。再挑戦できないのです。乗り越え、何度でも再起する粘り強さをみなさんに持って欲しいと思います。「堅き樫の木より、しなやかな柳のごとくあれ。」という言葉を贈ります。

最後に、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、今後大学の教育・研究環境を充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者のみなさまには、引き続き、本学への支援や応援を切にお願い申し上げます。入学生のみなさんは、大学における様々な機会を生かし、溌剌と輝く京大生となられんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、おめでとうございます。

## 平成25年度学部卒業式 式辞

平成26年3月25日

本日、ご来賓の沢田敏男元総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、2,831名の皆さんに学士の学位を授与する運びとなりました。学士課程を無事修了され、学位を得られたことに深

く敬意を表するとともに、篤くお慶びを申し上げます。併せて、今日の卒業式を迎えるまでご家族および関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、大学として御礼申し上げます。117年にわたる京都大学の歴史において、皆さんを含めた本学の卒業生の累計は196,900名となりました。

さて、皆さんが入学された時にはひとりひとりが夢を抱いていたことと思います。その夢は人に拠って、大願成就を目指す極めて野心的なものから、具体的現実的なものまでさまざまであったかと思います。それを胸に本学の門をくぐり1年、2年経つにつれ、やがてその夢が段々と霞んだり、変形してきたこともあったでしょう。そしてそれぞれの夢は、新たな装いをまとったり、新しく生まれたりして、入学時とは大きく変わっていることでしょう。私は皆さんの夢の変容に対して、苦言を呈するつもりはありません。むしろそれこそが皆さんの成長そのものであり、その成長を大いに言祝ぐものです。それと同時に、入学時の皆さんの夢というものをここでもう一度思い返して、己を見直し、自分自身で今の夢に向けてcommence、すなわち始動する日が、今日の卒業式commencementであるということを心してほしいと思います。

皆さんは京都大学において一定の学業を修められ、今日の卒業式に臨んでいます。高浜虚子に

「一を知って 二を知らぬなり 卒業す」

という俳句があります。皆さんには「一を知りて二を知らず」ということを脱し、さらに無知の知に目覚め、これからも止むことなく学び続けてほしいと思います。そのためには多彩なジャンルの本を読み、自分の専門分野のみならず、広い分野の知識を貪欲に吸収するように心がけてください。

さて、現在、我々はインターネットに容易にアクセスできる環境にどっぷりつかっています。そこでは単純な問題については、答え探しが、大きな努力も必要とされず、検索という形で容易にできます。いいかえると我々は安易な答え探しが可能な世の中に生きているといえます。一方、答え探しが容易にできない問題に直面する場合も多々あります。さてどうすればいいのでしょうか。本当に我々を悩ます問いは本来そのようなものです。その時には私たちは自分の頭で考えるしかありません。考えるとは一体どういうことでしょうか。私は、考えるということは、様々な事柄の可能性やつながりを新たに組み直し自分の頭の中で整理するということではないかと思っています。すなわち、問題を前に、頭の中にこれまで蓄積してきた知識や経験を組み替えることこそが、考えることの本質ではないかと思います。このプロセスは一種パラレルな処理です。一方、インターネットから入手できる情報は順に発見できるシリアルなものです。この違いが、いくらインターネットに向かっても、考えていることにならない最大の理由ではないでしょうか。インターネットのようにシリアルにひとつずつ情報が出てき、それが片付いたら、次、そして次という形式は物事を調べる時には非常に役立ちます。ある特定の事柄についての知識を得たいときにはとりわけそうです。一つずつ知識を積み上げていくということはそれ自身大変重要ですが、何か全く新しいことを考えようとすると、本来ばらばらに分類されていた異なる分野の知識を組み合わせるパラレルな処理が必要で、脳の中ではそのパラレル処理がニューロンとニューロンの繋がりということで行われています。それゆえ、色々なことを体験し、経験し、知識を蓄え、それを柔軟に組み合わせ、組み替え新しいものを創造する訓練を積む必要があるわけです。

本日の卒業式で一つの区切りをつけ、考える習慣をつけ新しい夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、京都大学はこれからも応援していきます。卒業する皆さんには、ときには母校を訪ね、また同窓会活動の場として、また生涯の学習の場として、京都大学を人生の基軸としてこれからも積極的に活用していただけるように願っています。

卒業して、社会で活躍される皆さんは、機会を与えられた様々な場所で、本学で身につけた自学自習の精神を活かし、活躍されることと思いますが、一方で母校の京都大学で更なる教育を受け、探究を続ける友人の応援もぜひお願いします。また、修士課程に進学され、大学院で研究を続ける人も多いと思いますが、京都大学は、優秀な人材を活かし、グローバルに評価される大学でありつづけるように必要となる環境改善に尽力してまいりますので、一心不乱に研究に打ち込んでくださるように願います。

最後に、今後も絶えず自らを省みて、学業を積み、身体を鍛え、こころを磨き、人の痛みや社会の問題を敏感に感じとり、闊達な対話を大切にし、ご活躍されることを願います。学士の学位を授与された皆さんへの私の餞として、自らを十分に鍛え、自ら責任を持って、自身の中にあるものに頼るという「自鍛自恃」という言葉をおくります。

本日は誠におめでとうございます。

# 平成26年度博士学位授与式 式辞

平成26年9月24日

本日、博士の学位を授与される229名の皆さん、おめでとうございます。その中には65名の女性と70名の留学生が含まれています。京都大学の博士号取得者は累計41,145名になりました。列席の副学長、研究科長、教育部長をはじめとする教職員一同、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

学位を授与される皆さんのご家族、ご友人、関係者の皆様には、秋の蒼空（そうくう）のようなすがすがしい気持ちでこの学位授与式にご臨席いただいているものと存じます。学位を授かる皆さんが今日を迎えられたのは長年にわたって支えてくださった皆様のおかげです。私たち教職員一同も、ここに至るまでの皆様方のさまざまなご苦労やご支援に対して篤く御礼を申し上げ、今日の喜びをともに分かち合わせていただきます。

学位を授与される皆さんは、日々の研鑽を通じ鍛え上げてきた自らを信じ、幾多の苦難を乗り越え、大学院において専門を修め、その専門において自樹自立できる力を京都大学博士の学位の授与という形で世に認められることとなりました。皆さんのうちでもとりわけ留学生の諸君は、言語や習慣の異なる異国で最先端の学を修めるということは並大抵の努力でできることではなかったでしょう。私は皆さんの長年にわたる研鑽を大いに称えたいと思います。

ただし、誤解しないでください。称えられるべきは学位論文そのものだけではありません。学位論文の成果は月日と共に陳腐化していくかもしれませんが、それは悔やむべきことではありません。重要なことはここに至る過程です。つまり、課題を見つけ、目標を定めて、研究を遂行し、その目標まで到達したその道程こそが、かけがえのない経験だったのです。まさにフロンティアの開拓に皆さんは第一歩を踏み出したといえるでしょう。敷かれたレールの上を走るのではなく、レールなき知のフロンティアを開拓しながら進む過程を、持てる才能をフルに発揮し、皆さんは見事経てきたのです。さて、これからどうすべきでしょうか。自らが敷きえたレールをそのまま延長するにとどまらず、その過程で身に付けた開拓力こそが学位の本当の意味するものです。新しいことにぶつかって、悪戦苦闘しながら、障害を次々と乗り越え、成果を得る、その能力を対象を限定せずにこれからの人生で広く応用していただきたいと思います。それは、これから研究職に就く人も研究職を離れて社会のリーダーとして活躍しようと思っている人についても同じです。あなた方が得た学位はそのフロンティア開拓の過程を見事にやり遂げた才能と努力の証しとなるものです。

皆さんに今日ぜひ心に留めておいてほしい言葉があります。唐宋八大家の一人、蘇洵（そじゅん）の「管仲論」に出てくる言葉です。

「夫（そ）れ功の成るは、成るの日に成るに非ず。蓋（けだ）し必ず由（よ）って起こる所有り。」

つまり、成功は、その日一日で成し遂げられたわけではなく、それまでの積み重ねがあってこそはじめて実現します。さらに続けて。

「禍の作（お）こるは、作（お）こるの日に作（お）こらず。亦（また）必ず由（よ）って兆す所有り。」

一方、禍も突然起こるのではなく、注意していればその兆しがみえるものだというのです。

蘇洵の言葉からは、他人の成功を羨まず、成功者がそれまで積み上げてきた努力に敬意を払い、ともに祝う余裕を持つべしということが読み取れます。また、我が身においては、自分の志を高く持ち、目標を定めて、必ずやるという信念で進み、成功に向けての傾注が必要であることを教えられます。一方、これからの長い人生、うまくいかない時もあります。あるいは世の中がうまくいっていないことを痛切に感じる時もあるでしょう。その時、禍が突然降りかかったと嘆いたり、起こってしまってから後知恵で批評するのではなく、必ず兆しがどこかにあったはずなのに見つけられなかったと反省することが重要です。さらに、社会にとっての大きな禍の兆しを敏感に見つけることこそが、これからのリーダーの備えるべき資質の一つであろうかとも思います。

今後、世界はますます小さくなります。皆さんのなかには、日本が窮屈に感じる人もいるでしょう。狭い日本に閉じ籠もらないで、世界に雄飛してほしいと思います。その際に注意しておくべきことがあります。文明や文化の熟度に応じ、人々の交際は洗練され、他人への配慮も細やかなものとなり、洋の東西を問わず、間接表現は豊かになっていきます。例えば、日本語では、嫉妬の感情は、恨み、辛み、妬（ねた）み、やっかみ、嫌味、嫉み、焼きもちなど多数表現し分けることが可能です。英語にも、jealousy、envy、covetousness、

resentment、discontent、spite、grudge、green-eyedなどさまざまな表現があります。一方、インターネットの世界では、「いいね！」があらゆる場所を跋扈（ばっこ）し、単純を旨とする割り切りが大いに力を得ている状況にも出会います。このような両極端にも見える状況においてもみなさんは、しなる木のように柔軟に人と接し、他人の気持ちを汲んで、花を咲かせるすべを身に付けてほしいと願います。この一種のデリカシーもこれからのリーダーの要件です。

皆さんと京都大学との縁（えにし）は、同窓会や生涯の学びを通じてこれからも続きます。京都大学は皆さん一人一人の人生を支える確かな基軸となるべきであると私は考えてきました。一方で、皆さんも母校を温かく見守り、さまざまなご支援をお願いします。とりわけ、留学生の皆さんには、母国に帰られ、海外に23ある地域同窓会組織を通じて、京都大学や日本と母国を結ぶ「人の架け橋」として活躍されている先輩の後に続いてください。そして、京都大学、ひいては日本との絆を一層太くかつ強くしてくださることを大いに期待しています。

最後に、今日は私の総長としての最後の学位授与式になります。6年間にわたり一心不乱に職務に打ち込んできたつもりです。その間、多くの方々にお会いし、楽しく仕事ができました。とりわけ高い志を胸に社会に飛び出す皆さんに今日のように餞（はなむけ）の言葉を贈れることは私の最も喜びとするところでした。京都大学は素晴らしい大学であったと誇らしく思っています。諸君の今後の健闘を祈ります。

本日は誠におめでとうございます。

## 第16回京都大学全学教育シンポジウム「これからの共通・教養教育」総長基調講演：「京都大学の考える教養教育の方向」

平成24年9月12日

皆さん、おはようございます。昨年に引き続き、桂キャンパスで全学教育シンポジウムを開催いたします。以前は淡路島で行ったこともあり、関係者のご努力で第16回を迎えることになりました。昨年、毎年出されるレポートの内容を実行に移して、全学共通教育あるいは学士課程の教育を改善する方向に踏み出しましょうと申し上げました。それを受けて、関係各位に大変な努力をしていただき、かなり前に進んだと感じております。

今日は、「京都大学の教養教育」という題で皆さんにお話をしたいと思っております。ふだん先生方は教育の現場で、学生と対峙しながら、どうやって人を育てようかということに心を砕いておられると思います。そういったことは十分承知しておりますが、私は今、少し離れた立場におりますので、その観点から考えていることをご紹介したいと思います。

まず、こちらをご覧ください。これはよく使われるスライドで、左下にアップルの創始者のスティーブ・ジョブズ氏が写っています。最近亡くなられましたけれども、彼はテクノロジーとリベラルアーツの交差点で仕事をしてきたと言っていました。技術的には最高のものでも、現代文明や社会のニーズを直感的に考えなければ、マーケットに受け入れられない、そのためにはリベラルアーツの知識が必要で、単に技術屋だけではいい製品はつくれないのだということを言っていました。日本の技術者も最近、ようやくその端緒を示すようになったと思っておりますが、そのために我々は教育で、こういった観点を学生諸君に伝えなければならないと思うところです。

社会情勢の変化につきましては、皆さんひしひしと感じておられると思いますが、日本社会だけではなく、世界中が非常に大きく変動しております。当然ながらこれからの若者は少なくとも30年、長い人で60年生きなければなりません。また、生き抜かなければなりません。つまり生存していかなくてはなりません。その間さまざまなことが起こるでしょう。私も70年近く何とか生きながらえてここまでやってまいりましたが、その間、社会情勢は大きく変化したと思っています。これからの変化率はもっと激しいと思います。複雑な課題が次々と浮かび上がっており、その課題解決がそう簡単に一人一人の研究者あるいは技術者だけではできないという状況になっております。

日本学術会議が、これからはサイエンス・フォー・ソサエティだということを声高に叫びました。しかし、専門家は、専門分野で競い合うには、それを細分化しなければならないジレンマがあり、専門化が進めば進むほど、社会の大きな問題に対して答えを出しにくい構造になっている

ことも指摘されておりますし、私もそう感じます。ですから、今世紀を支える若者を育てる立場にある私たちが何を考えればいいか、どう考えればいいかということを少し考えてみたいと思います。

今お話ししましたような、世の中の変化が激しくなった理由は単純です。それは昔、例えば紀元前1000年、紀元0年、紀元500年のときには、人間は1億人ぐらいしかいませんでした。世界中で1億人ですから、今の70分の1です。ですから、物事がゆっくり進み、自然破壊というものがほとんどなく、自然からの恵みを使いながら技術を発達させ、本当に緩やかに物事が変化していったのです。ところが、産業革命の後、人間はいろんなものを自分でつくり出すということに目覚めました。そのために、人口は指数関数的に伸びております。つまり、物が豊かになって、文明が進むと、ますます変化率が上がっていくということです。21世紀に入って、20世紀よりもはるかに速い変化が起こるということを我々は強く認識しなければなりません。

このような状況の中で、石油は、生産が消費に追いつかず、生産しようと思っても簡単に掘れるところに石油はなくなり、2006年が石油の産出量のピークで、今や生産量は大きく下降線をたどっております。また石油以外の資源についても、100年以内に銀、金、石油、鉛、銅、亜鉛、天然ガス、ウラン、モリブデン、タングステンといったいずれも身近にある生活を支える必要な資源が枯渇すると予想されています。このために代替物質あるいは新しく創り出す技術が必要ですが、その技術開発のスピードと悪化スピードとを比べると、明らかに悪化スピードのほうが速いのが21世紀です。

その中で我々は、どういう人材を送り出せばいいのかということを常に考えておかなければなりません。端的に言いますと、地球全体で、人類という生き物だけが猛烈に種の中で数を増やしております。現在人口は70億人で、50年後にはおそらく90億人、あるいは100億人になると言われております。

このスライドは私がまだ現役だったころにつくったものですが、この時は先進国が10億人、途上国が50億人だったのが、50年たつとこれが90億人になります。生活水準は、我々先進国が途上国の10倍ぐらい良い生活をしてきたわけですが、今後おそらく彼らの生活水準もよくなってくるでしょう。地球全体で必要なマクロなバランスを考えると、消費生活物資の総量が50年たつと、必要量が2.5倍になります。2.5倍という生活物資を、我々は、いろんな問題を克服しながら増していけるでしょうか。そのために専門を究めていただいているわけです。

ところが、専門家は専門ばかりに目をやりますから、マクロなことは忘れがちで、環境問題や、資源枯渇や、感染、パンデミックに対して発言が部分的にあるだけで、部分オプティマムを図ってやっても全体のオプティマムにはならないという大きな課題があります。

そこで、我々の後を継ぐ若い人たち、30年、40年の時代を生き抜く人たちにとってどういう教育をすればいいかということが大きな問題になります。日本の人口は減っておりますけれども、先進国でもまだアメリカは移民等を入れて増えておりますし、ヨーロッパも増えている国が多いです。世界全体としては爆発的に増えております。このような状況の中で、資源の枯渇の問題があって、各国が資源の囲い込みをスタートしております。どの国も経済成長を目指すと言います。つまり、どの国も経済を成長させればいいという単純な豊かさの追求に走っております。そうするとどういうことが起こるかということは、普通に考えればすぐにわかります。どうしようもなくなる。どうしようもなくなることをどう解決するかということを考える人材をつくらなければいけない。したがって、リベラルアーツを考えるときには教育、日本、そして地球全体、つまり人類全体の現代文明を取り囲む状況をよく考えて、多様な問題に取り組めるようにすることが必要です。もちろん技量や知識がなければなりませんが、それだけではやっていけないということです。

学問は、学会に行けばよくおわかりのように、次々と新しいテーマが出てきて、その都度、専門家が現れ、新しい研究室が生まれます。かといって古い研究室はなくなりません。したがって、どんどん細分化が進みます。学問の細分化に関しての高校生の意識は、私は物理をやりたい、私は生物をやりたい、私は歴史をやってみたい、という程度の意識しか持っていません。しかし、現実に大学に入りますと、京大は総合大学ですから研究室は非常に多くあって、工学という大枠の中にも非常に多くの分野があって、研究室が山のようにある。それぞれが先端で論文を発表し、新しい知見を積み上げる。これが研究という営み、本質的な部分ではあります。しかし、学生がすべての専門に知識を持つということはできません。学問全体を知の樹に例えると、どこかの専門の枝葉のてっぺんにとまって、新しい知識を掘り出す、つくり出すという作業をおこないながら、全体を俯瞰するものを学ばせるにはどうやって教育するか、これが大変重要な問題になろうかと思います。

夏目漱石の「素人と黒人」という随筆があります。「黒人」と書いて「くろうと」と読ませています。「玄人」とは書いてありません。その中で、あるものを観察する場合に、第一に我が目に入るのはその輪郭であると言っています。仏像なら仏像を見た輪郭です。次にその一部、手なら手、眼なら眼、鼻なら鼻というところに目が行く。さらに鼻を見ますと鼻の穴が気になる。高さが気になってくるのです。漱石はまた、観察や研究の時間が長ければ長いほど、だんだんと細かいことが目に入って来る、ますます小さい点に気がつくと言っています。小鼻の中の穴の数は幾つあるか。なぜ左右が違うか。好奇心はどんどん尽きるところがありません。いわゆる黒人というものは、この道を素人よりも先へ通り越した者である。そればかりやっているわけですから当然です。そして、そこに彼らの自負が潜んでいるらしいと、少し漱石は嫌味を言っています。彼らの素人に対する軽蔑の念もそこから沸いてくるらしい。けれども、プロですね。彼らは彼らの経路を誤解して評価づけた結果にすぎない。自分たちは偉いというのは、それを誤解して自分たちが偉いと思ったにすぎない。彼らの経路は単に大から小に進んだだけである。浅いところから深いところに達しつつあるものでもなければ、上部から内部に突っ込んでいったものでもないというふうに切り捨てています。観察が輪郭に始まって、全体像を見て、一部に移っていくという意味を別の言葉であらわすと、観察が輪郭を離れてしまうということに帰します。つまり全体像が見えなくなる。離れるのは忘れる方向へと一歩近寄るのと同然である。しかも一部に注ぐ熱心が強ければ強いほど輪郭の概念は頭を既に離れてしまう。彼が言っているのは芸術論なのです。しかし、科学や学問にも当てはまると思いませんか。

だから我々はどうすればいいかということを考える必要があって、そのためにはリベラルアーツ論が重要となってくるのです。これは皆さんが共有している話を私が繰り返しているにすぎないかもしれません。ますます複雑化する社会問題、例えば、領土問題一つにしても、原子力エネルギーの問題についても、誰も決定的なことは言えない。さまざまな要因が絡むからです。学問がますます専門化しているので、専門家は例えば原子力発電所の事故であっても、例えば、私は炉工学の専門家ですので反応はわかりません。反応はわかりますが、廃炉についてはわかりません。私は原子核専門を学びましたけれども、核融合をやっていますから原子力発電のことはわかりません。私は理学を研究しているので、工学的観点からいう原子力のことはわかりません。このようになってしまっていて、全体的に原子力の必要性、あるいは問題点を大きく論じることから、ある意味では逃げようとしている姿勢が見えてきませんか。つまり、先ほどの漱石の言葉で言いますと、輪郭を見ようとしなくなるということです。

一方、グローバル化が進んでおり、それこそ複雑系の問題と同じで、ニューヨークで起こった小さな出来事がたちまち日本の経済に影響を及ぼします。北京で蝶が羽ばたくと、ニューヨークで嵐が起こるという比喩があったと思いますが、つまり複雑系の本当にちょっとした事柄が、結果的に、違うカタストロフィにつながることがあるわけです。これはいろんな意味での文化、文明、経済、あるいは人の生き様がグローバル化したといえます。グローバル化というとすぐにビジネスのグローバリゼーションのことが頭に浮かびますが、そうではないと私は思います。

したがって、知識の全領域的地図が必要で、そのためには一般的な知識をいかに集積するか、逆に高度な知識を理解する上で一般的な知識はどう役に立つか、この両方の視点が必要です。一般的知識ばかりで、どの専門にも深く入り込んだことがない人は浅薄と言われてしまうと思います。両方のバランスについてどのように興味を持たせるかということが教育の上で大変重要ではないかと思います。

また、社会や学問、そして世界における自己の位置づけ、自分をどう確立するかということに、教育という言葉は余り適当ではないかもしれませんが、人を育てるという意味で「育人」という立場から言いますと、自己の位置づけをどのように自覚をしてもらうかということが最も重要ではないでしょうか。そこがグローバル化の原点だろうと思います。知識だけではなく、対話力も当然必要ですし、課題をどう解決するか。これはどのように達成するのか、それぞれの先生の思いがすべて違うと思います。私の経験から申しますと、すばらしいアイデアを次々出してこられる方のお話を伺うと、その背景には専門だけではなくて実にさまざまな知識、経験をお持ちです。家の問題、人間関係、あるいは経済的な事情等々、その経験数や様々な場面に遭遇した人ほど創造力は高いように思います。芸術から音楽、体育、職業課程といったものの知識は普通、受験勉強に余り重きを置きませんが、そういうことにも興味を持って勉強してきた子が数学の分野ですばらしい実績を上げた例があります。音楽をやったがゆえに数学でひらめきがあったということを言われる大数学者もおられるようですが、興味を

持っているあらゆる学問の数、経験の数、知識の数というものが創造力に必要な組み合わせを決定するのではないかと思います。n個の組み合わせは全部足し算すると2のn乗（べき乗）になるのです。知識のべき乗で変化しますから、創造力をめざす人はいろんなことにチャレンジしてほしい。チャレンジしておく必要があると思っています。

次の課題ですが、カリキュラムは様々なことを教えなくてはならないという一方で、単に教科を増やすだけで身につくかといえばそのようなことはありません。先ほど言ったように全体像が見えるということが大変重要です。これに関して私は「務本の学」という言葉を使っているのですが、ものの本（本質）を務むるの学。これは論語にある、儒教的な発想で使われた言葉ですが、この漢字だけを眺めますと、ものの本質を追求する。全体を見てものの本質を追求する。務本の学こそ大変重要なことだろうと私は感じています。

そして、グローバル化といいますと英語です。当然、英語のTOEFLやTOEIC何点以上ということを言いますが、それだけでいいかというと、そうではないということは本学の先生方は皆さん強く認識しておられますし、私もそう思います。多言語との並習で哲学の多様性、つまり言語を学ぶということは言語の背景にある多文化を理解することにつながります。だから、たくさんの言語を勉強してみようということは多文化に接しようということにもなりますし、もちろん多文化に接する能力を増やしていくことにもつながります。その意味で、外国語はビジネスのために話せればいい、読めればいい、書ければいい、あるいは研究のために論文が書ければいいという問題ではないことは、言語を教えてくださる先生方の背景にあると強く認識しております。

最近は、外国へ行かない日本人と言われておりまして、外国へ行っている日本人は大きく減り、学生をどうやって留学に行かせるかということも問題として言われます。しかし、私も誤解しておりましたが、実はあまり減っていないそうです。西洋から東洋へ関心が移って、アメリカやヨーロッパの大学に行く学生は減りましたが、中国をはじめアジアに出向いている学生はかなり増えました。トータルとしてあまり減っていないということを最近本学のある人から教えていただきました。そういう意味で、学生は留学に行く気はあるのですが、そのような変化について、我々年配の者が少し違う視点でその現象を見ていないかということです。留学に行かせるというのは、単に学問をよその大学で経験するだけではありません。そんなことは京大でできるでしょう。関東圏の高校生に話を聞きますと、関東にはあらゆる種類の大学がありますから、関東から出て、京大へ来る必要はないと多くの学生が感じているように思います。教育担当理事の淡路先生を筆頭に、私も含めて、関東の高校に行って、高校あるいは大学教育というのは関東圏だけで閉じてしまうものではない。外国にいきなり行くのは大変かもしれないが、少なくとも日本には関西もあるし、九州もあれば、北海道もある。いずれ関東に戻るというのは構わないけれども、そういうところで違う文化を学びなさいと言っております。留学についても経験知のレベルを高める必要があります。

魅力ある人間、実力ある人間は、質の高いコミュニティから生まれます。私は胸を張っていいと思いますが、京都大学は質の高いコミュニティだと思っています。学生が目を輝かせて、あの先生に会ってよかった、目から鱗が落ちたという人がたくさん、教員の中でも学生時代の経験を語られる方がおられます。教える先生の熱意。例えばこのスライドにはポケゼミの絵が下にかいてありますけれども、ポケゼミというのはその効果が大いにあるだろうと思います。研究の最前線で、なぜ先生がその問題に着目し、どういう方法でどのように毎日取り組んでいるのかという背中を見せる、あるいは語るということがいかに重要かということがわかります。

教養課程については、今、カリキュラムの見直しを進めていただいております。一方、組織については、現在、全学で一致協力して学部教育をおこなうとなっていますが、外から見ると非常にわかりにくいところがあります。東大にあるような専門の教養学部ではなくて、全学で学生をしっかり教えるという国際高等教育院をつくろうという取組みを行うことになりました。昨日もその委員会がありましたが、いずれ私から現在どのようなディスカッションが行われているか、現状について、全学メールで発信をしたいと思っております。

現在、人間・環境学研究科及び理学研究科が教養教育の実施責任部局とする体制になっておりますが、それを改革し、国際高等教育院が企画と実施責任を一元的に負う体制に移行する方向で検討しております。現在は、高等教育研究開発推進機構で機構長のもとに、執行協議会、全学共通教育システム委員会、専門委員会科目部会を構成して、実施責任部局として人間・環境学研究科と理学研究科に教育の多くを行っていただいております。

国際とつけたのは国際化時代に対応できるような幅広い知識、日本文化ももち

ろん、語学も含めて、幅広い国際的な視野を持つ国際教養人を本学から出したいという意味でこの名前が提案されています。教育院長のもとに、学部長で構成され、重要事項を決定する教養教育の協議会、それから企画評価委員会、評価専門委員会を設置します。これらは大変重要でして、実施科目やクラス、教育内容、成績評価等を行うのですが、各学部から責任のある人が、しっかりした意識でここに集まってもらわないといけません。高等教育院の組織については現在議論をしていただいておりますが、教養教育部、基礎教育部、外国語教育部で構成されます。これは名前が最終的にはどう変わるかわかりませんが、基本構想はこのようになっております。それぞれに部会があって、先生方に参加していただく予定です。国際高等教育院には専任教員を構成員として置きます。他部局を兼担する専任教員もいるかと思います。それで、単に兼担で、ここには専任的にいろいろなことに直接タッチしませんが、教育にタッチするという兼担教員もいる。このようなイメージで恐らく構成されていくと思っております。このような構想を実施できる体制を各部局の教授会で集中的に議論していただくよう、お願いしたところです。繰り返しになりますが、構成員は、関係部局の推薦を受けて配置する専任教員、それから教育院独自の人事で配置する専任教員、それから兼担教員、それから非常勤講師、となっていくだろうと思っております。

2枚ほどスライドをお示ししていますが、今、仮に中国の学生と京都大学の学生を比較してみたら、京都大学の学生がずっと勝っていると胸を張って言えるでしょうか。中国の大学は世界ランキング等で日本の上に入ってまいりました。あれはフェイクで、学長などの大学のトップだけだろうと思っていました。つまり、アメリカからたくさんの優秀な中国人研究者を中国の大学のヘッドに戻します。そうすると当然アメリカで研究していたわけですから共同研究者はアメリカ人が多くなり、ランキングの上での国際的な配点は高くなります。当然そういった方々は英語をよく話します。語学も当然、英語という意味ではよくできる人たちが戻ってきています。そんなものだろうと思っていましたが、実はそうではないということを最近痛感するようになりました。私も立場上多くの大学をめぐります。中国の大学にも行ってまいりました。先週、蘇州で中国南部の五つの大学の学長とディスカッションをしてまいりました。各大学はすばらしい取り組みをしています。全球化時代、グローバル化時代に一流の人材をどう育成するか、いろんな角度からの取り組みを真剣にやっています。特に上海交通大学の学長はすばらしいアイデアの持ち主でした。一度行かれる機会があれば、ぜひ見てきていただきたいと思いますけれども、優秀な学生をちゃんと表彰して、トップ13人に対しては破格の処遇をしています。それに向かって多くの学生は努力をしております。

私は30年ほど前に世界銀行から、武漢大学で何か教えてこいと言われまして、行ってきたことがあります。その帰りに北京大学へ寄りました。11月ごろだったと思いますが、寒いさなかです。朝の5時半ごろ、目が覚めたので、薄暗かったですが、私は構内の池の周りの散歩をしました。そうすると、多くの学生が既に歩いているのです。図書館の前へ行きますと、当時30年前ですから電気事情もよくありません。しかし暗い電灯に数人が集まって、本を開けて英語を読んでいるのです。その後ろには、光の輪に入られなくて暗い中でずっと後ろに並んで、ちょっとの光で言葉の勉強をしている人もいたのです。こんな熱心な学生と、しかも優秀な人を集めていると思いますが、京大生を比べたら、これは太刀打ちできないと、そのときですら思いました。日本の学生は外国に比べて勉強する時間が極端に少ないということを指摘されて久しいですが、学生の間はしっかりと勉強して、課外活動も積極的に参加をして、力強い日本を引っ張るリーダーとなっていただきたいと強く願っているところです。これは学問の分野だけではありません。様々な分野でリーダーとなって卒業生を輩出する必要があると思っております。

日本の停滞は20年、30年続くのではないかと揶揄されておりますが、そのためには次の次の議論を今からやり、新しい時代に追いつく必要があります。自分の専門を継ぐ専門家をつくるということも部分的には必要ですが、もっと重要なことは、これまでにも社会の中に次の時代を背負う多くの人材を輩出していかなければならないということです。京都大学という伝統ある大学が、今後も世界のリーダーを私たちがつくるのだという強い意志です。会社や官僚のトップの方を見ますと、京都大学の卒業生が減っています。少し寂しい気がします。会社のトップになることがリーダーとは限りません。コミュニティのリーダーも必要です。教員もそうです。研究者もそうです。トップを出すのだという強い意志を私どもは考える必要があるのではないでしょうか。

以上で私の講演を終わります。どうもありがとうございました。

**松本紘 第25代総長の式辞ならびに挨拶等は右記のURL・QRコードよりご覧いただけます。**

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/president/successive/president25/speech